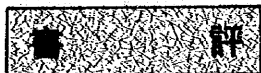


|                  |                                                                                                                                                                                                                   |
|------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 本郷隆盛・前坊洋・稲田雅洋著 近代日本の思想(1) : 佐久間象山・福澤諭吉・植木枝盛                                                                                                                                                                       |
| Sub Title        | Takamori Hongo, Hiroshi Maenobo and Masahiro Inada, Three thinkers in modern Japan : Shozan Sakuma, Yukichi Fukuzawa and Emori Ueki (1)                                                                           |
| Author           | 飯田, 鼎                                                                                                                                                                                                             |
| Publisher        | 慶應義塾経済学会                                                                                                                                                                                                          |
| Publication year | 1979                                                                                                                                                                                                              |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.4 (1979. 8) ,p.549(145)- 552(148)                                                                                                                                  |
| JaLC DOI         | 10.14991/001.19790801-0145                                                                                                                                                                                        |
| Abstract         |                                                                                                                                                                                                                   |
| Notes            | 書評                                                                                                                                                                                                                |
| Genre            | Journal Article                                                                                                                                                                                                   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790801-0145">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19790801-0145</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



本郷隆盛・前坊洋・稲田雅洋著

## 『近代日本の思想』(1)——佐久間

象山・福沢諭吉・植木枝盛——

幕末から明治初期における近代思想の形成について考える場合に、19世紀後半以後の西ヨーロッパの経済社会と政治思想状況が無視しては何事も語ることではできない。しかしながら「外来思想の受容」という本書の重要なテーマについて考察する前に、筆者は、「歴史におけるひとつの偶然」とでもいうべきことを記し、著者ならびに読者の批判を請いたいと思う。

ある人が、どのような思想を抱くかはしばしば、彼が早い時期に、従って若い時代にまずどのような思想の洗礼を受けたかによって決定的な影響をうけ、たとえば、その後どれほどの衝撃に出会ったとしても、容易にその痕跡を拭い去ることはできない。そのもっとも興味深い例として、エドアルト・ベルンシュタイン(Bernstein, Eduard 1850~1932)をあげることができる。

若くしてドイツ社会民主労働者党に入党したベルンシュタインは、1878年、いわゆるゴータ綱領の採択によって統一された社会民主党の、社会主義鎮圧法による弾圧の後スイスに亡命し、チューリッヒに赴いてここで社民党の機関紙、“Sozialdemokrat”の編集に従事し運動を展開した。この当時のベルンシュタインは、マルクスの名前はきいていたにしても面識はなく、いわんやマルクス主義の何たるかも知らなかった。この時点で彼を支配していた思想は、フェルディナンド・ラッサール(Lassalle, Ferdinand Johann Gottlieb 1825~1864)の国家主義的な社会主義であり、これによって初めて社会主義の洗礼をうけ、その関心の芽が培われ、労働運動に身を投じたのであった。『共産党宣言』の著者としてのマルクスやエンゲルスよりもラッサールの影響をより深刻にベルンシュタインがうけたといえ、今日、やや奇異に思われるかも知れないが、ラッサールはドイツ労働運動の初期においては、マルクスやエンゲルスより決定的に重要な役割を果たした。このラッサール主義の影響が、やがて彼をして修正主義理論を構築させる基盤となったのである。

もし何らかの理由で、まずはじめにマルクスの思想

的影響をうけ、それからラッサールを学んだとすれば、修正主義論争は別の形をとったのではないかと思う。

このように、ある歴史上の人物が、どのような思想家に成長するかは、そのもっとも早い時期における思想とのめぐりあいという半ば偶然的な事情に左右されるのではないかと思う。

外来思想の受容についての今ひとつの問題は、思想をうけ入れる主体の問題がある。思想家という以上は、ただこれを無批判的にうけいれるのではなく、その社会におかれた状況についての危機認識の下でうけいれる場合には、より痛切に在来の伝統的な思想との格闘を、まさにその外来思想の受容によって敢行しようとするのである。いうまでもなくこの場合、その思想家が何をもって「危機」として意識するかに大きな問題がある。以上のような意味で、危機意識がもっとも強烈な形で発現した幕末から維新の時期にかけて、この3人の思想と行動には、相互に密接に関連する面とともに、西欧思想の受容にあつての態度においても明白な相違点とともに興味深い共通点がみられるのである。

本書を読み終って私は、根底にあつてこの3人の思想を貫くものとして、後進国に特有なナショナリズムがもっとも重要なモチーフとして描定されていることに打たれた。もっとも著者たちは、部分的にはこれにふれているとはいえ、全体としてこのナショナリズムの問題を共通認識として論点が整理されていないのは惜しまれる。これはこの「新書」がもつ宿命的缺陷ともいうべきもので、必ずしも著者たちの責任ではない。

「佐久間象山」の著者、本郷隆盛氏は、「近代日本の思想」を考察する場合、「わが国における近代国家の形成なかんずくその形成のされ方の特質」の重要性を指摘しておられるが(5頁)、これは重要な視点であると思う。「危機認識」という点では、佐久間象山も福沢諭吉もまた植木枝盛も、ひとしく共通にもっていたが、その内容については、彼らがそれぞれおかれた社会政治的状況の差異により、やや異ならざるをえない。何よりもそれは、彼らがその前途にどのような国家像を構想していたかという問題と密接な関係があるように思う。そしてその場合、佐久間、福沢および植木の3人の思想家は、まったく興味深い対比を示すのである。本郷氏はつぎのようにのべている。「渡辺崋山、佐久間象山、横井小楠らは対外問題に強い関心をよせ、いずれも伝統的な儒学思想の側に身をおきながら、それを思想的媒介としつつ近代西洋の学術・政治・経済

の諸制度を内面的に理解しえたすぐれた思想家であった」(9頁)。

著者はまず、象山の思想を、幕末の危機意識にもっとも敏感に反応した諸思想のうち、圧倒的に強い影響力をもっていた政治社会思想としての後期水戸学の思想、とくに会沢正志および徳川斉昭の思想との比較のなかで位置づけようとしている。会沢の場合、その「新論」にあらわれた国家認識は、古代天皇制国家における神道=祭政教一致の政治のあり方の上に立ち、西洋=キリスト教をイデオロギーとする夷狄観において、そのナショナリズムは前近代的性格に強く彩られていた。しかし幕藩体制の危機を感得しつつ、同時に強力な国民国家を構想していた点において、幕藩体制そのものを超越するという進歩的な側面をもっていた。

会沢の思想がキリスト教文明に基礎をおくヨーロッパ諸国の侵略の危険を強調することによって、その内容はともあれ、統一的国民国家の樹立の構想を示唆したものとすれば、徳川斉昭の場合には、「西洋を近づけないことがそれ自体自己目的化されている」(28頁)点で、幕藩体制を支える攘夷政策を根幹とする「鎖国国家」の追求もしくはそうした政策の継続である点が特徴的であった。しかも「日本の為」と「徳川の為」という二つの理念の辨別、この両者の緊張関係の認識そして前者の後者にたいする優越の意識(28~30頁)がより明確な形であらわれたのであった。

会沢正志および徳川斉昭の両者には微妙な思想的差異が認められながら、その共通項として古代天皇制的性格を出ることが出来なかったように思う。だが、国民的統一国家創建への志向が、暗示的に示されているにもかかわらず、それを具体的に明示するまでには至っていない。

以上のように後期水戸学のナショナリズムが、西欧にたいして反撥する排外主義エネルギーの発現のなかで強化され、西欧文物への認識もこの限界を出ることができなかったのにたいし、佐久間象山のヨーロッパ認識は対照的であったということができよう。

水戸学のヨーロッパ観が、「キリスト教は人倫を傷り死後の禍福を説くものであるとするいわゆるキリスト教=邪宗観にもとづき、同時にキリスト教が西洋の侵略行動を支える精神的根拠」(35頁)であるのにたいし、象山は、アヘン戦争の結果に鑑み、近代国家の武力を背景とする国家貿易の利潤追求という近代国際政治の現実を、ヨーロッパの行動のなかに理解したのであった。従って彼の砲術をはじめとするヨーロッパの技

術への深い理解も、開国による文明国への飛躍のためであり、そのナショナリズムもかなり具体性をおびたものであった。著者は、象山の「天意任せ」の観点のなかに、近代的国家像を模索する。本来、鎖国主義の立場に立つ彼の立場からすれば「開国和親に踏み切ることもできず、彼我の力関係の強弱を誰よりもよく知り、戦えば必敗することを十分承知しているが故に拒絶することができない」(51頁)という彼の不徹底な態度は、消極的な対外認識ではなく、やがてそれは盟友堀田正睦の積極的開国論につながる。「万国同様に同盟和親を結び、信義の国を懐け、あまねく強国と交わり、御国力充実に随ひ綱常倫理の教化を以て漸々彼らを懾服せしめ」、「ついに世界万邦の大盟主と仰がれるようになること(1857年[安政4年]11月堀田正睦意見書、本書68頁)というやや独善的な観点に基礎をおいていた。

著者は、本章の結論に近い部分で、佐久間象山の西洋思想受容の矛盾を、儒教によって培われた内面的道徳、日本=神州、西欧=夷狄という二元的対抗の意識を根底におき、朝廷・天皇尊崇を媒介とする国家への忠誠と、自己の信奉する儒学の母国中国のアヘン戦争における敗北によってうけた衝撃、西洋文化優越の認識のディレンマを、「封建思想と西洋近代思想との内面的対決」としてではなく、欧米との外交的接触を通じて、「欧米の武力にむりやりに屈服させられた」(146頁)としている点が印象的である。著者は、象山の思想が、儒教思想と西欧近代思想とのほげしい相剋と格闘の上ではなく、四囲の客観的状況から強制されて、いわばなくずし的に推移を遂げることを強調し、こうした思考のパターンが、すでに幕末において出来上っており、こうした思想の構図こそが、近代日本の思想状況に決定的な影響をあたえたとしている点は、きわめて興味深いものがある。この分析に筆者は大きな示唆をうけた。

さきにも指摘したように、人ははじめてうけた思想的洗礼がその後の彼の思考様式を決定的にするとすれば、象山こそまさにそうした思想家であったといえるが、ヨーロッパの思想に儒教思想をもって決定的に立ち向うことを通じて、これを批判摂取するというのではなく、客観的状況におされて安易な形でこれを受け入れたという断定は、当時のけわしい政治的状況を考慮すれば、やや酷な見方かも知れない。しかしこのような思考のパターンは、福沢諭吉にもみられたのではないだろうか。

「福沢諭吉—演戯する個性」と題する前坊洋氏の論稿は、福沢の行動の軌跡を通じて、彼の内面の知られていない側面を明らかにしたのであり、筆者独特の発想や観察は、評者の到底及ぶところではないので、印象だけをのべさせていただくが、「総じて福沢の個性は、秩序愛、権威主義的性向、演戯意識によって特徴づけられる」(159頁)という著者の見解に衝撃をうけた。

『福翁自伝』をはじめとする彼の著作には、そのなかに多分に演戯性を含むことを一貫して主張されるのであるが、ただここでいう演戯とは一体どのような意味であろうか。著者は、ある場合には、また「演技」とも書いている(161頁、162頁、とりわけ163頁からはじまる「第1章演技する現象」を参照)。たしかに福沢の生涯は、今日のわれわれからみると、まさに“英雄の生涯”と呼ぶにふさわしい劇的な波瀾に富むものであったにもかかわらず、何となく人生を「芝居」とみるような醒めた一面がみられた。彼には若い時代以来の多難な人生航路において、感奮興起するとか、他人にたいして激怒するというようなはげしい感情の起伏はみられず、反面、クールによくこれに耐えて激情にうち負かされそうな時にも、よくこれに耐えて、心の動揺を抑制して外に現わさない場合が多かったように思う。つまり福沢の行動には、いつどのような場合でも、いわば「醒めている部分」があって、それが彼の演技あるいは演戯の源泉になっているのではないかと思う。そのもっとも顕著な例は、「明治14年の政変」に処する彼の態度のなかにみることができよう。福沢には、何事にも一歩間をおいて客観視する態度が一貫しており、彼の人生観の根底を支配する一種独特なシニズムが、そのクールな行動様式を導き出したのではなかろうか。

明治14年の政変のような政治上の理由によって、大きな精神的被害をうけたとき、人は多くの場合、はげしい憤激に駆られ、政府批判に身を委ねるか、あるいは政治嫌いに陥いるとかがまず普通であろう。だが、福沢の姿勢は根本的にはさして変化がみられない。

「コナナ訳けで、私は十四年の政変の其時から何も実際に関係はない、俗界に云ふ政治上の野心など思ひも寄らぬ事だから誠に平気で、唯他人のドタバタするのを見物しているけれども、政府の目を以て此見物人を見れば、又不思議なもので、色々な姿に写ると見える(『福翁自伝』岩波文庫版、285頁)。

福沢には、このように自己の利害にもっとも関係が深く、それゆえ凡人ならば決して冷静ではありえない事件にたいしても、ある種の余裕をもって臨み、場合

によってはシニクに対応するという演技がみられる。筆者も、著者が文中にあげるさまざまなエピソードにみられる演戯性を否定するものではないが、ただ著者は演戯と演技とを並列的に使用しているが、どのように区別して使っているのであろうか。著者は「役割演技、政治的演技」(198頁)とともに演戯についてもべているが、この区別がはっきりしない。福沢の人生における身の処し方のなかに、さきにもべたように、充分な平衡感覚に裏打ちされたクールな態度がもし演技と云えば、云えないことはなかろう。それはいわば自己抑制と合理性の独特の発露であり、福沢をして卓越した思想家たらしめた真髓であるが、著者は、福沢のこの面よりは、彼の内面的なひずみを、まさに著者のいう秩序愛、権威主義的な性向、演戯意識によって特徴づけようとする。文章が難解で充分に読みとることが出来ないのは遺憾であるが、「演技と相対性の世界」が福沢の思想的本質であるというのであれば、もっと具体的に説得的に述べられないだろうか。たとえば、至るところにみられるつぎのような一節は、何をいっているのか充分には理解できない。

〈村〉的「清明」の理想は、集団を主体とするその単純な役割構造に根拠づけられている。

相互にわかりあう「人格」的な接触の場において構造化せられる規範としての役割演技からは演技性が剝奪せられるのである。その理想が、文化として永続する。このタテマエとホンネとの分裂は、ホンネの部分、欺詐術策として増殖せしめる一方、タテマエに、精神の安息の場としての機能を附与する。福沢の個性は、まさに、かような文化に対して、演技と相対性を明文化し、秘事を、「智術策略」として、白日のもとに称揚した点にこそ存するのでなければならぬ。(239頁)。

筆者は、福沢の人間性の奥深いところにひそんでいる一種の虚無主義的存在を、著者によって「演戯」という形で教えられた。しかし、著者が福沢の著作について読みが深いことは認めるが、少し読みが過ぎていゝ面がありはしないだろうか、また福沢の民権論や国権論などは、著者のいうところの政治的演技とどのような関係があるのであろうか。今後、福沢諭吉協会の同人として著者に望むところは、単刀直入に、直截に論点を提示することであり、文学作品としてならともかく、社会科学の論文としては修飾的言辞が多すぎて、徒らに論理の筋を辿るのを困難にしている。著者の趣味かもしれないが、いかがなものであろうか。

さて、先を急ぐことにしよう。

植木枝盛と福沢諭吉との関係については、土佐で『西洋事情』を読んで刺戟され、明治維新直後、三田の演説館に通い、やがて福沢の思想と行動が明らかになるにつれて次第に離れていったことは、家永三郎教授の研究によってすでに明らかにされている。著者は、家永三郎、外崎光広両氏の研究に触発されて、民権思想のなかでの彼の特徴、枝盛における思想と行動の乖離の問題などを中心に、彼の思想を日本の近代史のなかで位置づけようと努力しておられる。

私は本書を読んで植木についての認識をあらたにしたのは、彼は「外国語が若手で、生涯洋書は手にしていない。人一倍自尊心の強かった彼にすれば、不得手な外国語の学習にプライドが傷つけられることに耐えきれなかったということは大いに可能性のあることである」(255～256頁)という叙述からである。このことは、自由民権思想というものがあくまでの外来のものであり、ヨーロッパをたえず先進国として意識し、たんに思想としてではなく、その思想を生み出したヨーロッパ社会の認識という点で決定的にマイナスの面をもっていると思われる。しかし著者は、筆者とは別の観点からつぎのように論じている。

「しかしいずれにしても、枝盛が同郷の馬場辰猪や中江兆民とは違った思想家になった背景のひとつには、外国語を自らのものとしえなかったことが考えられる。なぜならこの二人は西欧近代を身をもって体験し、英・仏語等を熟知していたが故に、かえって彼我のちがいに気を配りすぎて西欧の思想をそのまま日本にあてはめるのに一種のためらいをもったのにたいし、枝盛は書物を通じて得られた西欧近代の理念を観念的に純化して受けとめているきらいがあるからである」(276頁)。

本論文は、植木枝盛の民権論を、抵抗権を根幹とする憲法草案の検討に焦点において解説しているが、いまこれについて詳細に論評する余裕はない。植木枝盛の婦人解放論について独自の評価がみられるが、しかし彼の行動の軌跡からして、「婦人解放論」と「婦人観」とは別物であったのではなからうか。すなわち植木には、福沢にはみられないロマンティズムが根強くその行動を支配していたため、その人民主権論は、広汎な階層を包む革命的民主主義(＝ブルジョア民主主義左派)の色彩をおびていたが、同時にその強烈な、

ロマンティズムは、彼の民権思想を独特のものとしたのであって、福沢ときびしく対立した点でもある。彼は思想家としては幕末に生れるべき人物であり、その意味では、福沢と比較するよりも、佐久間象山や渡辺崋山などとの対比もまた興味深いと思う。

それぞれ個性的な論文の集成で教えられるところが多いが、三者の関係の理解となると、かなりむずかしい問題を残しているように思う。〔1979年、新書判、341頁、有斐閣、780円〕

飯田 鼎

(経済学部教授)

G. クロシック著

『ヴィクトリア社会の

アルティザン・エリート』

本書の著者 G. クロシックは現在ハル大学経済社会史学部の講師であり、イギリス社会史・労働史学界の指導的研究者——E. ホブズボーム、J. F. C. & R. ハリソン、H. ベリング、S. ボラード、J. サヴィル、E. P. トムソン等——につづくつぎの世代の優れた研究者の一人としてイギリス国内でも注目されている歴史家である。本書はかれの博士論文“Social structure and working class behaviour: Kentish London, 1840-80” (London大学、1976年)を修正・再構成し、Croom Helm Social History Series (総編集者はサセックス大学の J. F. C. ハリソンと S. イェオ)の一冊として刊行されたものである。かれはまた、*The Lower Middle Class in Britain 1870-1914*, 1977 の編集者であり、現在、1976年に刊行が開始された *Social History* の書評編集者でもある。

1850年代から70年代にかけてイギリスにおける労働運動が体制内化ないし右傾化したことの理由を労働貴族層の新たな興起に求めることが妥当であるか否かをめぐって、近年イギリス労働史学界に一連の論争がおこなわれてきたが、本書もその論争史上に位置づけられるべきものであり、著者自ら述べているように、労働貴族の概念をその分析の中心においている。周知のように、われわれは労働貴族の「経済学的解剖」を E. ホブズボームの先駆的論文に負っているし、その

注 (1) Eric Hobsbawm, *The Labour Aristocracy in Nineteenth-century Britain*, in his *Labouring Men*, 1969, pp. 272-315.